

藤崎 慎吾 作家・サイエンスライター

海の壁

まだまだ謎の多い未知のフロンティア・海。
そこには人間が容易に近づくのを妨げる四つの壁が存在する。
堅牢なその壁を次々と越えていった先に広がるのは、いったいどんな世界なのか。
気鋭のSF作家、藤崎慎吾さんが我々を海底の不思議へと誘う。

人間にとっての最初の壁・海面

奄美大島北部の笠利湾には四つの支湾があつて、その一つを赤尾木湾という。地図で見ると、海岸線が真円になりそうな形をしている。別名を奄美クレーター——昔、彗星の核が落下してできた地形の一部らしい。近くには星窪という字も残っている。伝えられるところによると、このとき、島中に飛び散った隕石の鉄分が泥染めの泥に混じって、大島紬の艶やかな黒となつていそう。去年の11月に取材で同島を訪れたとき、私は赤尾木湾の海岸にも立つてみた。残念ながら、そこがクレーターであるという実感は得られなかった。しかし、伝説に思いをはせながら景色を眺めていると、静かに打ち寄せる澄んだ水の底に、さまざま古い記憶が降り積もっているのを感じる。それらをすべて明らかにすることは、おそらく容易ではないはずだ。

海には四つの壁があるように思う。
一つは海面だ。厚みはともかく、全世界の海洋を覆い尽くしている。ある見方をすれば、これが人間にとって意外に堅牢な障壁になつていよう。太陽から届いた光は海面で一部が跳ね返され、残りのはねじ曲げられる。さらに水分子や懸濁物によつて散乱されたり、吸収されたりするうちに、せつかく海面を通り抜けた光も急速に減衰していく。条件にもよるが、赤やオレンジなど暖色系の色は、水深10メートルくらいでほとんどなくなってしまう。どんなに澄んだ海でも、水深100メートルまで届く光は1%以下だ。光の一種である電波も、似たような運命をたどる。だから海岸に立つて海を眺めても、海面より下が見えることはほとんどない。



Photograph : Shingo Fujisaki

考えてみれば不思議だ。宇宙だつたら肉眼でも、何百光年、あるいは何千光年というとてもない距離を隔てて光っている星が見える。双眼鏡があれば、月のクレーターが見える。ちよつとした望遠鏡があれば、火星の白い極冠や土星の輪が見える。しかし、それを海へ向けてみても、海面の照り返しか、せいぜい数十センチ下を泳ぐ魚が見える程度だろう。視覚に多くを頼っている我々にとつて、海のほとんどは暗闇に等しい。同じフロンティアでも、宇宙に比べて海に今ひとつ人氣がないのは、見えないことが大きな要因の一つではないだろうか。

礁嶺の外は宇宙と同じ？

海にはもつと壁らしい壁もある。
私は亜熱帯の島へ行くと、よくサンゴ礁でスノーケリングをする。ほとんどの場合は波や流れが穏やかで、生き

物が密集している「礁池」で過ごす。水深が1〜3メートル程度しかないブルのような場所だ。しかし、外海との境界である「礁嶺」が近い場合は、それを越えてみることもある。

礁嶺では、たいてい波が激しく砕けている。当然ながらうねりもあり、水の流れは複雑だ。海底は極端に浅く、干出しているところもある。うっかり近づくと、もみくちゃにされたあげく、岩に叩きつけられないとも限らない。はつきり言つて怖い。でも、それを我慢して、うねりが来たときにエイヤと泳ぎ出すのだ。そして、うまく礁嶺を越えることができたなら、再び海は静まり返っている。それこそ、ぼーんと宇宙に投げ出されたような気分だ。

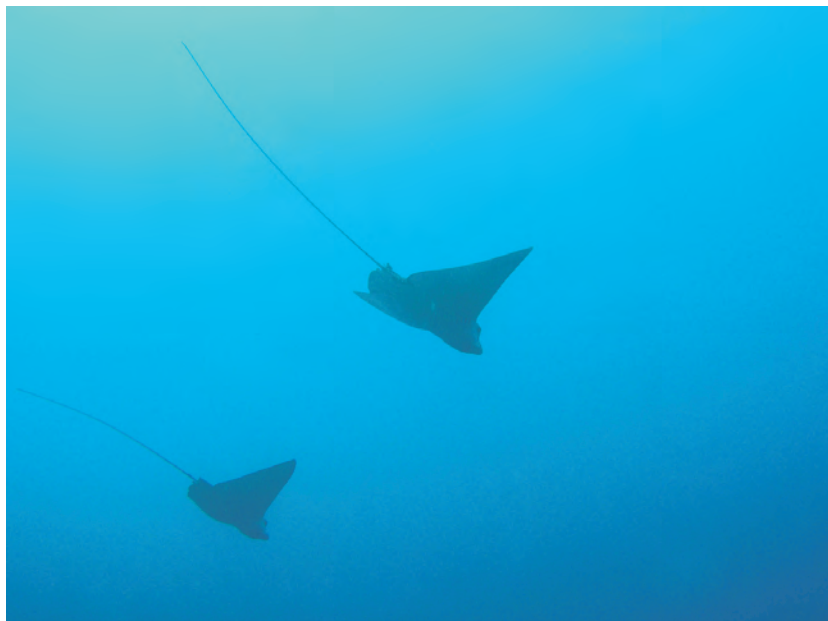
礁池の水は、たいてい白く濁っている。しかし、外海は驚くほど透明度が高い。海岸と直交する方向に何本もの溝や畝を伸ばしながら、海底は徐々に深くなっている。それを水中で見渡すと、まるで高い空から山脈を眺めているようだ。出会ふ生き物は、礁池より少ない代わりに大きい。甲羅の長さが1メートルを超えるウミガメや、体長1.5メートルにもなるメガネモチノウオ(ナポレオン)、そして幅が3メートル近くに達するマダラトビエイなどがおなじみだ。

とにかく礁嶺の内と外とは、まったくの別世界なのである。そしてサンゴ礁によつては、まるで城壁のように堅固な嶺が海底から立ち上がっていることもある。

光の存在しない世界・深海

次の壁は、やはり浅海と深海との境界だろう。しかし、それがどこにあるのかは、はつきりとしていない。

スキューバで水深30メートルくらいまで潜ると、もう薄暗い感じになる。すでに述べた通り、水深100メートルまで届く光は1%以下だ。それでも人間の目にとっては、



まだ真つ暗闇ではない。海の状態や場所にもよるが、本当に何も見えなくなるのは水深200メートルくらいだという。ここから先を「深海」と呼ぶことが多い。

ちなみに宇宙飛行士の毛利衛さんは、水深1300メートルでも物が見えたという。それは星と星との間にある、完全に光が存在しない暗さを知っているからではないかと、ご本人は言っていた。

そういう特別な人を除けば、おおむね水深200メートルに深海への入り口がある。どうしても生身でそこをくぐりたければ、飽和潜水という高度な技術と装備を用いなければならぬ。それでも現在は、水深700メートルくらいまでが限度だという。そこから先へ行くには潜水船が必要だ。

話は戻るが、空中から海の中をのぞくのは困難である。しかし、いったん海面をくぐってしまえば、条件のいいときで上下左右に半径数十メートルの範囲を眺めることは可能だ。しかし、それもごく浅い海での話である。もちろん深海では、ライトをつけなければ何も見えない。その明かりも太陽光と同様、水によつてすぐに散らされ、吸い取られてしまう。結果的に数十メートル先までを、部分的に照らすのがやっとだ。

海洋研究開発機構(JAMSTEC)の潜水調査船「しんかい2000」は、1989年、日本で初めて黒い湯が噴き出る海底温泉——ブラックスモーカーを発見した。沖縄の伊是名海穴という窪地で、水深は1600メートルである。その海底に下りて30分ほど小さな湯の噴き出し口(その湯は透明だった)を観察してから、少し上昇して方向転換しようとして左へかじを切ったときに、もうもうと煙のような湯を吐くブラックスモーカーが姿を現した。つまり、そのすぐそばにいたにもかかわらず、全然、気がつかなかったのである。パイロットの話によると、左へかじを切ったのはたまたまで、もし右へ切っていたら気づ

かないままだっただろうという。深海というのは、そういう場所だ。

別の潜水調査船パイロットも「たとえ大ダコや映画に出てくるような怪物が隣にいても、水中ライトが照らしていなければまったくわからないでしょう」と言っている。一方、もしスペースシャトルが巨大なタコ形宇宙人に追いかけていたら、どうだろう？ 窓から死角になっていたら見えないかもしれないが、宇宙飛行士が船外活動をしていれば絶対に気がつくはずだ。地上でも、口径1メートル程度の望遠鏡ならシャトルの形がわかるくらいなので、その近くに宇宙人がいたら大騒ぎになるだろう。しかし、深海の大ダコには、もし存在していたとしても、なかなかお目にかかれそうにない。

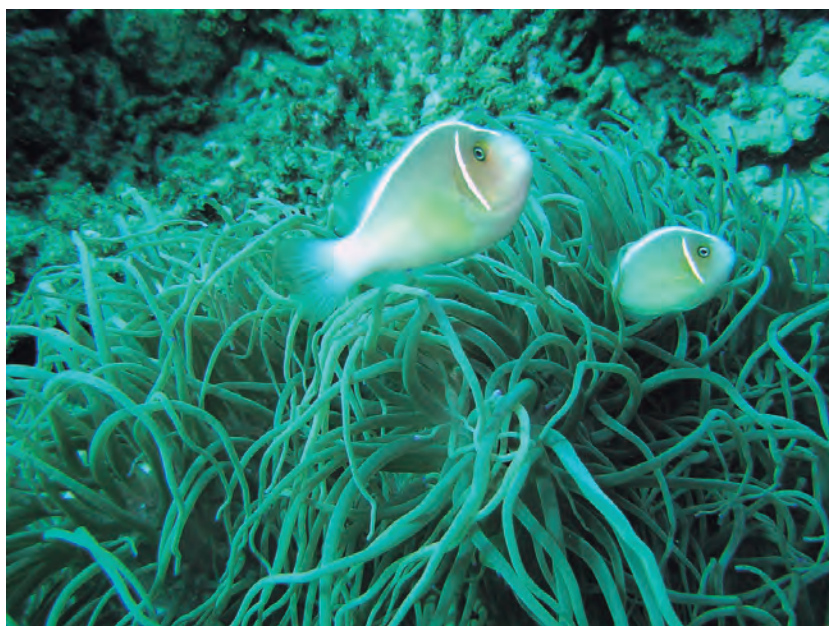
海は地下にも広がっている

最後の壁は海底である。だが、そこで海が終わるわけではない。これは比較的最近わかってきたことなのだが、海は地下にも広がっているようだ。

地球は46億年前、無数の小惑星が集まって出来たと考えられている。一方、地上に落ちてきた小惑星や、そのかけら——すなわち隕石は、質量の2%の水分を含んでいる。ところが現在、地表にある水をすべて合わせても、地球の質量の0.02%にしかならないという。残りの99%以上はどこへ行ったのか。全部が蒸発したとはとても考えられないから、地下に違いがないというわけだ。

実際、ある実験に基づく予想では、地表の海水の5倍にもものぼる水分が、地球の下部マントルに含まれているらしい。下部マントルとは、地下670キロメートルから2900キロメートルの深さにある岩石の層だ。どうやってそこまで水が運ばれたのか。

実はベルトコンベアがある。海溝で大陸地殻の下に沈



み込んでいる海洋地殻だ。地殻というのは、その名の通り地球の表面を覆う薄くて硬い殻のこと——それは爪が伸びるくらいの速度で少しずつ動いている。たとえば、太平洋の海底は、東太平洋海^{かいほう}膨という火山帯で生まれた後、はるばる日本海溝や伊豆小笠原海溝といった場所まで移動して、そこから地下深くへと沈んでいく。この旅には約2億年かかる。当然のことながら、海洋地殻には水分がたっぷり含まれている。その水分が、下部マントルにまで届けられているのではないかというのだ。

もちろん、途中の上部マントルで抜けていく水分もあるだろう。それが岩石の融点を下げて、マグマが生じるきっかけをつくっているという説もある。また、大陸地殻と、その下に沈みこむ海洋地殻とは擦れ合っているわけだが、水分はその間に生じる摩擦力を減らす作用もあるはずだ。つまり地下の海は、火山噴火や地震の引き金を引いているかもしれないのである。

マントル中にも生物はいるのか？

では、生物はどうなっているのだろうか？ 地下の海にも生き物はいえるのだろうか。これもホットな話題だ。

少なくとも地下1000メートルくらいまでは、微生物の生息が確認されている。その先は、まだわからない。地下深くへ行けば行くほど高温高圧になり、酸素や栄養分は減っていくはずだ。それに生物がどれだけ耐えられるかを考えれば、ある程度、予想することはできる。

地表では113℃でも活動できる微生物が発見されている。この温度は地下4000メートルあたりの地温に相当する。一方、高圧条件下ではタンパク質がより安定する傾向があるので、もっと高い温度になっても生物は生きていくかもしれない。仮に150℃まで耐えることができれば、マントル中に暮らすことも可能である。12

1℃で増殖できる微生物が発見されたという報告もあるから、まったくありえないということはないだろう。

酸素や栄養分の減少についても、水素を二酸化炭素で酸化してエネルギーを得るような「化学合成無機独立栄養」生物だったら問題ない。それは現実存在するし、そもそも酸素のない高温な環境というのは、生命誕生当時の地球環境と同じだ。我々の最初の祖先は地下深くに生きている微生物に似ているか、もしかしたら、そのものかもしれないのである。

さらに言うと、地球の表面のように温暖で酸素が多い環境というのは、むしろ宇宙では珍しい。地球の隣にある金星や火星の大気は、二酸化炭素が主成分だ。表面の温度は金星が465℃、火星がマイナス120℃からプラス25℃だが、生命誕生当時の地球や同時期の火星は、むしろ今の金星に近かった。また、木星の衛星エウロパには、表面を覆う氷の下に海があると予想されており、地球のように海底から温泉が噴き出している可能性もある。しかし、その海水に酸素が含まれていることは、あまり期待できない。

したがって、もし火星やエウロパ、金星のような星に生命がいる(あるいはいた)とすれば、それは地球の地下にすむ微生物に近いのではないかと予想されている。そのため現在では、海洋生物学や微生物学の専門家ばかりでなく、宇宙や他惑星の環境を研究している学者までもが、地下に熱い視線を注いでいるのだ。

海底という壁を越えると、そこにはさらに巨大な海が広がっているばかりか、過去や宇宙への扉までが開かれているかもしれない。どうしたら、その魅力的な世界をのぞけるのだろうか。壁の向こうへ行く方法は？

詳しくは述べないが、音波や地震波を使うと地下の様子をある程度、知ることができる。スイカやメロンの表面をたたいて、中身の質を調べようとするのに近い。非常に



ふじさき しんご

1962年東京都生まれ。米メリーランド大学海洋・河口部環境科学専攻修士課程修了。科学雑誌の編集者や記者、映像ソフトのプロデューサーなどをしたかわら小説を書き、99年に『クリスタルサイレンス』（朝日ソノラマ）でデビュー。現在はフリーランスの立場で小説のほか、科学関係の記事やノンフィクションなどを執筆している。最近の著書に『深海のパイロット』（光文社）、『ハイドゥナン』『レフト・アローン』（いずれも早川書房）などがある。

有用な方法だが、間接的であるのは否めないし、生物を探索となるとまったくお手上げだ。直接、目で確かめるには、やはり穴を掘るしかない。

石油ではなく、科学調査を目的とした海底の掘削は1966年から始められ、多くの成果をあげてきた。そして2007年からは、最新鋭の掘削船が本格的に活動を開始する。その名は地球深部探査船「ちきゅう」——日本が科学技術の粋を集めて建造した船だ。長さ210メートル、重さ5万7500トンと、掘削船としては世界最大級。科学調査では用いられたことのないライザー掘削という方式を採用し、理論的には水深数千メートルの海底に深さ7000メートルの穴を掘ることができる。これは上部マントルに到達できる距離だ。この船が我々にどんな世界を見せてくれるのか、今から非常に楽しみである。



奄美大島から始まって、思いつくまま海の話を書き連ねてきた。多くの人にとつて、そのほとんどはただの話でしかないだろう。私にしてもそうだ。しかし、それでは飽き足りない性分というものがある。

赤尾木湾へ行くのに、私はもちろんダイビングマスクを忘れなかった。それで海の第一の壁を破ることができる。フィン（足ひれ）も忘れなかった。それで第二の壁を破ることができる。ボートがあれば、その先へも——。そして私はおなじみのマダラトビエイやナポレオンに会い、カラフルな熱帯魚たちにもあいさつをしてきた。もちろん彗星のかげらは見づからなかったが、おかげで大島紬の伝説は、より身近なものとなった。

いずれ私は、第三や第四の壁も越えてみるつもりだ。そして遠い昔の祖先や、はるか宇宙のどこかにいるであろう仲間たちに少しでも近づきたいと思っている。

盛口 満 沖縄・珊瑚舎スコーレ

貝の風景

アメフラシをいじくって歓声を上げる生徒たち。
いつしかゲッチョ先生の想いは、
貝殻拾いに夢中だった中学生時代へと帰ってゆく。
ゲッチョ先生にとって、南房総の海とそこで拾った貝殻こそ原風景。
生徒たちも今、自らの原風景を積み上げる真つただ中にいる。

潮だまりでのフィールドワーク

「気持ち悪いな」

サカが潮だまりの中で往生している。

「サカ、オマエの長靴、オレに貸せ。オレが捕る」

ユーキが叫んだ。しかし、サカはユーキと交代しない。

そうなると「大丈夫、手で捕れつて」と、皆でサカをけ

しかけるが、まるでダメ。そうこうするうちに、ラクが網

を持って戻って来た。

「おーっ、クニユクニユしてる」

サカはようやく長靴で、網の中へとそいつを蹴り込んだ。

1月下旬というのに、沖縄の日差しはもう暑さを含んでいた。沖縄県那覇市にある小さな学校。それが、僕が講師を務める珊瑚舎スコーレだ。この日は学校に通う中学生と高校1年生の合同フィールドワーク。自然講座を担当する僕と、沖縄講座を担当するタケちゃんの二人の

引率で、沖縄島南部をめぐる。

グスクと呼ばれる沖縄県独特の城跡や、ウタキと呼ばれる聖地で、タケちゃんが歴史の話をする。――が、てんで聞いちゃいない。恐れ多くもウタキ内の石灰岩の壁をよじ登りだすやら、「危険立ち入り禁止」とある壊れかけたグスクの石垣に登り始めるやら……と、気が気でない。

「インドネシアに似てるね。バリ島みたい」

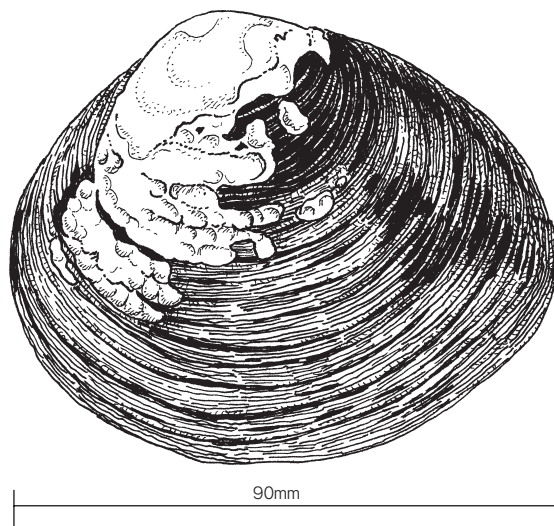
ウタキの森で、そんなやんちゃ者の一人、サカが言う。

彼はインドネシアからやって来た少年なのだ。

「タイの洞窟、めちゃくちゃでかくてさ……」

サカと会話を交わしているラクも、一時タイで暮らしていたという経歴の持ち主だ。フィールドワークに参加した、総勢わずか9名の生徒たちの内実は、誠に多様。

海岸に着くと、今度は僕の出番が待っている。潮の引いた浜に、大小さまざまな潮だまりが出現している。その海岸で生き物探し。



リュウキュウヒルギシジミ マングローブ林にすむ巨大シジミ

「ゲッチョ、ウミヘビみたいなのがいる」

シユンの声でそちらを見ると、水中に長さ2メートルほどの細長い生き物の姿が見えた。オオイカリナマコだ。このナマコの表皮には、ごくごく小さなイカリのような突起がある。そのために、触ると手の皮膚にナマコがくっつく……という特徴がある。

「おーっ、静電気みたい」

早速ユーキは手で触れて、手に貼りつくナマコの感触をそう表現。

そんな中、タケちゃんがアメフラシを見つけた。

「アメフラシ？ 何それ？」

インドネシア育ちのサカは、さすがにアメフラシが何であるかを知らなかった。ほかの生徒たちも何だそれ？という顔をしている。説明するより捕まえたほうが早い。そこで唯一、長靴を履いていたサカに、捕獲を命じたわけだった。

Illustration : Mitsuru Moriguchi

「おーっ」

網ですくったアメフラシをいじくると、とたんに濃い紫色の汁があふれ出てきた。汁は粘液と混じっていて、手につくとすぐに洗い落とせない。この紫の汁を雨雲に見立てて、アメフラシという名があるのだ。

「何これ？」

ラクも驚いている。

「アメフラシは貝の仲間。ほら、タコもいじると黒い墨、出すでしょ。それと同じで、敵から身を守るために出すんだよ」

僕はそう説明した。

「貝なんだ。こんなにフニョフニョしてるのに。でもこれ、気持ちいいよ」

アメフラシを盛んにもんでいるユーキはそう言った。ちなみにアメフラシはよく見ると、背中に小さな貝殻を背負っている。

「貝なら食えるの？」

レイはこう聞いてくる。

アメフラシを一部地方では食べる——と聞いたことがあるが、残念ながらまだ食べたことがない。

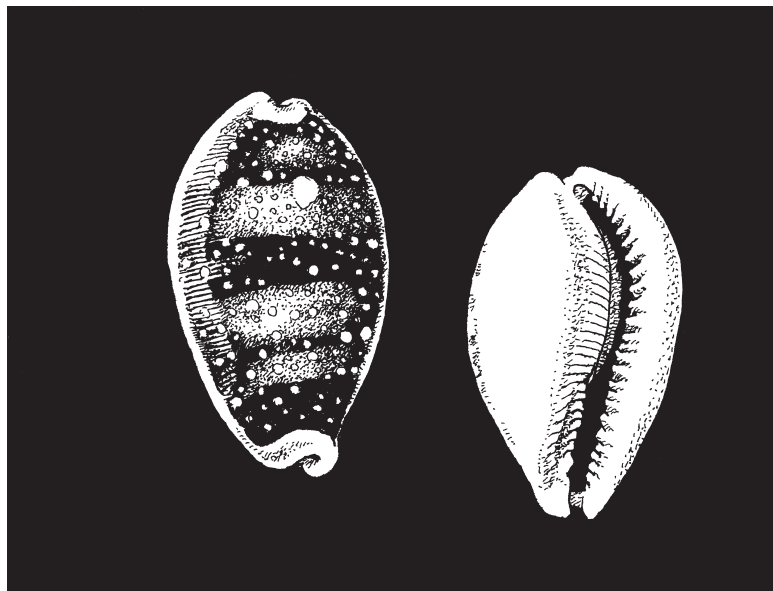
いずれにせよ、一見グロテスクな生き物こそ、生徒の目を引きつける。同じ貝ならアメフラシ。ちゃんと貝殻のある貝なんて、そこらにいても無視される。

「タカラガイ、いっぱいいるな」

案の定、タケちゃんがこう言っても、生徒たちは半分知らん顔。足元の水に浸かった岩の陰には、ハナビラダカラがたくさんくっついていただけだ……

貝殻が育んだ南へのあこがれ

珊瑚舎スコーレの生徒たちと違って、中学生頃の僕は、むやみに貝が好きだった。冬、北風が強く吹くこの季節、



ホシキヌタ 館山で拾ったタカラガイの一つ

休日になると僕は海へ行つて貝殻を拾い集めた。

僕の生まれ育ったのは、房総半島の南端にある館山市というところだ。その館山市にある沖の島が、僕の最も足を運んだ海岸だった。

丸っこい形。種によつてさまざまな色彩を伴う、つやのある殻。当時、僕の好きだった貝の一つがタカラガイの仲間だ。僕が中学生時代をピークとして拾い集めたタカラガイは、沖の島のものだけで18種にのぼる。その中には、チャイロキヌタやメダカラのように、拾い上げる気さえ起こさないほどの超普通種から、10年ほどの間にただ一度しか拾うことのなかったアジロダカラのような珍種もあった。

子ども時代の僕は、珍しい種類が拾えれば大喜びをし、普通種が転がっていれば、ただ黙殺した。あるものは「普通種」で、別のものは「珍種」。でも、その違いを深く考えることはなかった。

なぜだろう？

今にして思う。

渡辺政美さんが「三浦半島沿岸海域に於けるタカラガイ類の分布状況」(『みたまき』No.21所収)と題した報告を発表している。

渡辺さんのすごいところは、ある一年、のべ206日も同じ海岸に通い、打ち上がったタカラガイをすべて拾い上げたことにある。その数なんと9万9307個。「普通種」といつても、どのくらい「普通」であるかは、全部拾ってみなければわからないというわけ。その結果、全体の87%がメダカラで、第2位のチャイロキヌタの9.1%を加えると、この2種で96.1%も占めることがわかった。

渡辺さんの一年間の調査は、房総半島と東京湾を隔てて対岸に伸びる三浦半島で行われている。その調査地で見つかったタカラガイは全30種。

結局、この調査から渡辺さんはこんな結論を導いている。

「普通に見られる種類は、調査地点で繁殖しているもの。珍しい種類は、貝の幼生が海流に乗ってやってきて、一時的にすみついたもの」

具体的には、メダカラをはじめ、7種ほどが調査地で繁殖している種類だろう…ということ。つまり、残り23種は、一時的にすみついてはいるものの、この海岸では繁殖できていないことになる。

驚いた。

渡辺さんの調査結果と照らし合わせてみたら、僕が子ども時代に拾い集めたタカラガイでも、10種ほどは沖の島にすみついていないことになる。もつと南の海から、海流に乗った幼生がこの海岸にたどり着き、成長はしたものの子孫も残すことはなく、やがて死んで打ち上げられたものだったのだ。その中に、沖縄ではごく普通種のハナビラダカラもある。

小さな頃から漠然と南にあこがれていた。

その思いは、拾い集めた貝殻が箱にたまっていくと同時に、心の奥底に静かに積もっていった。

なぜ、「普通の貝」と「珍しい貝」があるのか。その理由を考えることはなくとも、「珍しい貝」にどこか「南」を嗅ぎとっていたのかもしれない。

人生の一時期、人は原風景を積み上げる。

僕にとって南房総の海と、そこで拾い上げた貝殻たちこそ原風景。その貝殻たちにいざなわれるようにして、僕は今、沖縄で暮らしている。

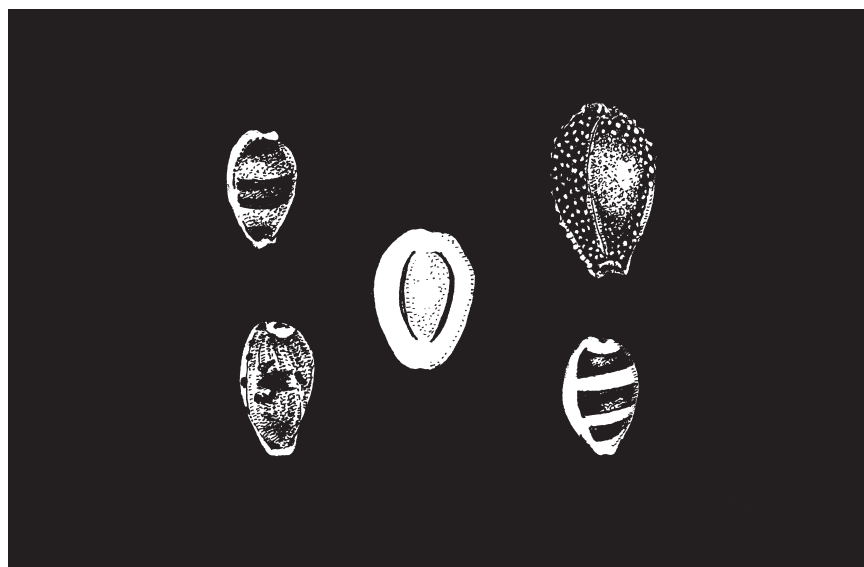
西表島の「オバアの教室」

いりおもてじま

「あーセンセイ、なんでやらんか」

オバアにそう言うてにらまれた。

沖縄島からさらに南。西表島のある民家。主のオバアとは旧知の仲だ。オバアは僕にとって、西表島の先生だ。



チャイロキヌタ
メダカラ

ハナビラダカラ

サメダカラ
ウキダカラ

(館山)

珊瑚舎スコーレには、中・高等部のほかに専門部が併設されている。

「人はいつでも立ち止まって考えていい。いつからでも学び始めていい」

校長であるホシノさんのそんな考えがあるからだ。

高校卒業以降の年齢なら、年齢制限なし。

西表島のフィールドワークは、島に伝わる祭りの見学と自然観察が主な内容だが、その行程に「オバアの教室」を組み込んだ。

島に生まれ、その生涯をほとんど島で過ごし、来たオバアは、マーニ細工の講師も務める。マーニとはヤシ科のクログのことであり、この葉を乾燥させたものから、民芸品を編むのだ。

天性の不器用を自覚している僕は、マーニ細工だけは遠慮させてもらっているの、ついオバアににらまれるのだ。

このオバアも貝が好き。

ただし、オバアの貝好きは食欲に根ざす。オバアと潮干狩りに行くと大変である——そんな話もさんざん聞いた。

オバアが昔、よく採って食べた貝の一つがヒルギシジミだ。これはマングローブ林にすんでいる。シジミといつても手の平サイズの大きさだ。中の身は水っぽくブヨブヨしているが、ゆでると縮む。僕も食べたことがあるけれど、確かに結構いいダシが出る。西表ではこの貝をキーズと呼ぶ。オバアはウタキを祭る、ツカサと呼ばれる神女でもある。

「神様に捧げるお酒はよ、大っきなキーズの殻に入れるんだよ。盃代わり。それをスンカンマカリと呼ぶさー。スンカンマカリに入れたお酒はね、おいしくなるんだよ。本当、不思議さねー」

オバアはこんな話をしてくれる。

神に捧げる食物も、焼き物の皿は使わず、大きな貝殻に載せると聞いた。

なぜだろう？

ある日、ふとこの話が気になったことがある。
オバアから聞いた別の話が意味を持ち出す。

それはオバアの若い日、オバアにとって最初で最後となる雨乞いの儀式の体験談。

「アメノヌシというのがある。男の人に全身センズルカズラ巻きつけてアメノヌシにするんだよ」

「雨の主」を仰せつかった男性は、シダの仲間のツル植物、カニクサを全身にまとうのだという。この「雨の主」が雨乞いの主役となる。

沖繩には草装の神がいる。

祭りの日、人が全身にツル草をまとうことで神に変身するのだ。

神の衣がツル草ならば、神の器は貝——そういうことかと思った。すなわち「自然」こそ神ということだろう。

そんな思いは、僕らにとってはるかな原風景とでもいうべきもの。

マーニ細工を教えながら、オバアは冗談ばかり僕らに話した。それでもオバアの持つはるかな風景を感じてほしくて、僕はこのいつときをフィールドワークに盛り込んだ。

欠けてしまった風景

「こんばんは」

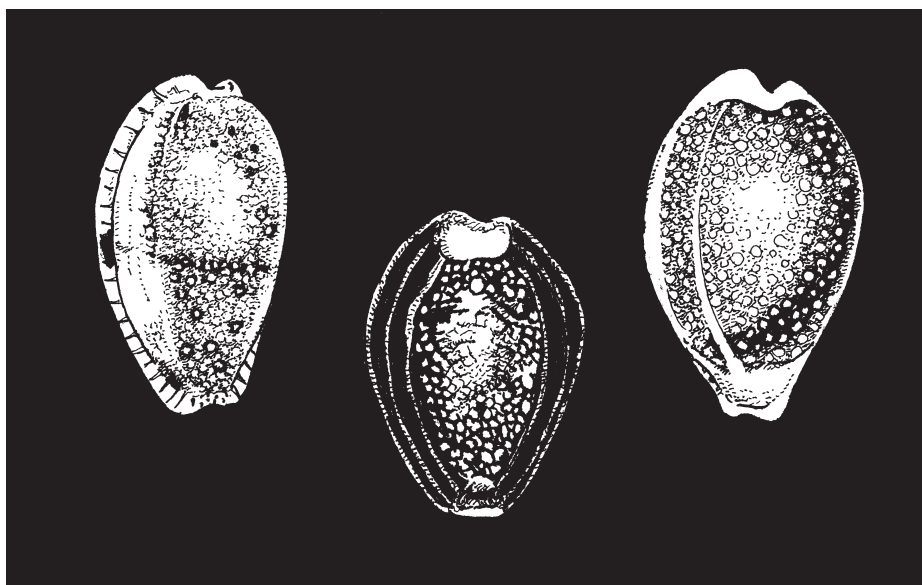
夕方6時。昼間の生徒たちが一人、二人と帰宅してゆくと、入れ替わりにスコーレに夜間中学の生徒たちがやってくる。

戦中、戦後の混乱期を経た沖繩には、義務教育を終了できなかった人たちが存在する。

「マチカnty」

待ちかねたよ、という意味だ。

「7歳のときから、自分の通う学校がいつか出来ると



コモンダカラ

ハナマルユキ

ハツユキダカラ

(館山)

思って、60年待ちました。夢は実現するものですね」
夜間中学1期生の言葉である。

皆、立派に社会生活を送り、子や孫たちにも恵まれている。それでも「学びたい」という気持ちはいまだにある。なぜだろう？

夜間中学の生徒たちの学力は人によってさまざまだ。でも、共通した思いがある。それは「学校で学びたい」ということ。国語だけでなく、数学だけでなく、体育も音楽も。ひいてはいつしよに学ぶクラスメートの存在も重要——。人はどこか欠けてしまった風景を取り戻そうとすることもできるのだ。そう思った。

アメフラシをいじくって歓声を上げる中高生たち。彼らはまさに原風景をつくる真つ最中にある。彼らの心の底は見えねども、やはり何ものかが静かに降り積もっているのだろう。彼らが人生のどこかで、このいつときを振り返るときがきつとある。

中学生、高校生、専門部生、夜間中学生。

さまざまな年齢の人たちが、スコーレの行事では一堂に会する。その多様さを見て、子どもの頃、貝殻にひかれたわけを思い出す。

僕が貝殻にひかれたのは、見果てぬ多様さをそこに見たから。

学校とは本来、色とりどりの貝殻の散らばる渚のようなものではなからうか——そんなことをまた思う。

もりぐち みつる

1962年千葉県生まれ。千葉大学理学部生物学科卒業後、自由の森学園中・高等学校の理科教諭。2000年より沖繩に移り住み、フリースクール「珊瑚舎スコーレ」の活動等に携わる。『はくは貝の夢をみる』（アリス館）、『教えてゲッチョ先生！昆虫の？が！』になる本、『雑木林は不思議な世界』（山と溪谷社）、『はくはコレクション』（福音館書店）、『骨の学校』（木魂社）、『青いウラゲを追いかけて』（講談社）、『ドングリの謎』、『冬虫夏草の謎』（共にどうぶつ社）など著書多数。